

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：34428

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12416

研究課題名(和文)類義的な法副詞の形式と機能に関する実証的・理論的研究

研究課題名(英文)Form and function of the synonymous modal adverbs

研究代表者

鈴木 大介 (Suzuki, Daisuke)

摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：90635393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：これまで、対象となる副詞群の中に「モダリティ志向」の性質を有するものと「談話志向」の性質を有するものの2つのタイプが存在することが明らかとなり、とりわけ後者のタイプでは副詞が様々な「語用論的機能」を担っていることが分かった。「談話志向」の副詞はモダリティの意味を表すだけでなく、様々な語用論的機能を有するのである。具体的には、生起位置によってその性質を異にし、全体として、特定の位置にしか見られない用法や機能もいくつか存在したわけである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

類義語や意味の研究において従来は節の内部、特に、対象となる単語の前後の連語関係、すなわちコロケーションをコーパスで調べる手法が主であった。そのため、話し手と聞き手という会話の視点や節と節の繋がりという談話の視点のように、1つの節を越えた観点も幅広く取り入れているのが本研究の学術的意義である。併せて、本研究に基づく類義語の記述、語用論的な視点・英語史の通時的な観点等に基づいた分析は、隣接分野と密接に関わっており、辞書・文法書、さらには英語教育に適用していくことで応用科学としての一面も兼ね備えている。この点は特に大きな社会的意義であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to understand in detail the properties of English adverbs, especially the relationship between form and function. Using various corpora of standard English, I provide a thorough description of the behavior and characteristics of the target adverbs on functional grounds. I further argue that English adverbs occupy the intersection between modality and discourse, and try to interpret them in light of pragmatic contexts.

研究分野：英語学

キーワード：副詞 形式と機能 語用論 英語史 コーパス 実験

1. 研究開始当初の背景

(1) 他の言語と比較すると、類義語の量や体系というのは英語の大きな特徴の一つである。英語の歴史を紐解くと、類義語というのは古英語以来の性質であり、以降も常に様々なタイミングで借用語が受け入れられてきたことによって、他の言語に類を見ないような量、あるいは体系を備えてきたことが明らかとなる。言語としてのこの比類ない特質、本質に迫ることで、英語という言語(構造)の理解が得られるのである。裏を返せば複雑で難解な事象とも言え、それは法副詞(の類義語体系)についても例外ではない。*certainly, probably, possibly*のように副詞の形成語尾である *-ly* がつくものもあれば、*indeed, maybe, perhaps* のように複数の形態素に端を発するものもある。さらには、*no doubt, of course* のように2語にわたる表現も存在し、一方で、*unarguably, undeniably, undoubtedly* のように接頭辞の *un-* を有する形式が多いという点も周知の事実である。このように実に多様な形式を有する「法副詞」という範疇において、「一つ一つの表現が他とどのように異なるのか」、そして「その意味(機能)が形式とどのように関係しているのか」という問いの解明を目指していく。

(2) 辞書や文法書の中で、ほぼ同じ意味、あるいは類似した意味とされる表現のペアやグループが提示されても、使用に際して使い分けの基準は明確に示されないことが多い。実際、異なる語句が同じような意味をもつ類義語間の分析となると、伝統的な語彙意味論領域において内容的意味の考察は行われているものの(Lyons 1977; Cruse 1986; Geeraerts 2010)、分析が意味論レベルにとどまっておき、方法論の難しさもあいまって語用論レベルでの考察が不足している状況にある。したがって類義語分析は、特に談話、発話行為、文法化、(間)主観化といった一般性が高い観点からの記述や説明の可能性を多分に残しており、様々な見地から考察を行うことが求められている。

2. 研究の目的

(1) 本研究プロジェクトでは、数ある類義語の中から法副詞(の類義語体系)に注目し、類義語間の意味(機能)の差異を明らかにしながら、法副詞の形式と機能の関連を考察する。コーパスという大規模な言語資料を分析に用いることで、各現象を詳細に観察し、徹底した記述に基づく実証的な研究を進める。さらに、これらの分析を基に、類義語の体系についての理論的な考察を深化させる。具体的には、実際に使用されている副詞の機能や用法に着目し、どのような使用域・文脈(あるいは、どのような統語・意味環境)でどのような形式が用いられるのか、という視点から当該副詞を詳細に分析する。

(2) 非母語話者として我々が英語を客観的に分析できることを背景に、類義語の使用に関する母語話者の無意識の領域に踏み込んでいき、それを解明していくことを目的とする。具体的には、現代英語の言語資料(上のコーパス)を用いて、分析項目を増やししながら、類義とされるペア(グループ)間の表現の相違を明らかにし、類義性について考察を進める。

(3) これまでに(i) *maybe* と *perhaps*, (ii) *doubtless* と *no doubt* といった各ペアにおける表現間の差異について、それぞれの語用論的機能との関連からその一端を明らかにしたが、本研究プロジェクトはこの一連の研究の延長線上に位置づけられる。これまでの研究成果を踏まえながら、分析対象を広げつつ、(i) *conceivably, maybe, perhaps, possibly*, (ii) *doubtless, no doubt, undoubtedly*、という二つの類義語グループの事例研究を進めることで更なる展開を目指す。

3. 研究の方法

(1) 類義表現の生起環境には、語順・倒置・後続要素などの統語的要因から、意味役割・可能性や強意の度合いといった意味的な要素、さらには代名詞や接続語のような照応・テキストの形成に関わる要素といった言語内的要因との関連が考えられる。さらに、コーパスに備わる文脈を利用することで節を超えた観点からも分析でき、談話の流れ、さらには話し手と聞き手のやりとりといった広範なコンテキストまで要因を探ることが可能となる。

(2) このようなコーパスの特性を利用することで、単文を超えたより広い文脈に基づく要因を扱うことができる。本研究では、より大規模なコーパスから収集したデータに基づいて、従来は軽視されがちであった文脈に依存した機能や文脈の中から生じる機能に着目し、表現との関係性を詳細に論じる。

(3) 具体的に、現代英語の代表的なコーパスを使用し、データ収集ならびに事例観察を行うことで、実証的な研究を着実に進める。手順として、(a) コーパスを中心とした言語資料から分析対象となる副詞の該当例を全て抽出し、一例一例に情報を付与しながら表現を比較することで、統計的に有意な要素を探る、(b) 大量の複雑な言語データに潜む規則性や傾向を把握するために、多くの変数を扱う多変量解析を導入し、データの集約、可視化を行う、という二点を軸に研究を進めていく。

(4) 今回の主な分析対象の副詞群としては、上述のように、(i) *conceivably, maybe, perhaps, possibly*, (ii) *doubtless, no doubt, undoubtedly*, という二つの類義語グループを扱う。特に(ii)については以前のプロジェクトで分析を行ったことがあり、一方で先行研究でも様々な分析が行われているが、依然として(似通った)形式と機能の関係が解明されていないのである。

4. 研究成果

(1) まず、(ii) *doubtless, no doubt, undoubtedly*の副詞群に対しては、結果として分析項目を増やすことで、更には新しい説明の観点を導入することで、その分析を深化させることができた。具体的には 生起位置、助動詞との共起関係、という従来の項目に加えて、主語の定性、主語の構造、主語の語数という5つの項目を取り上げ、それらとの関連で上記(a)の分析を行った。これらの項目が副詞間における使用の差異と密接に関わることを示し、併せて類像性の観点からその差異を説明することが妥当であると結論付けた。

(2) 次に、(i) *conceivably, maybe, perhaps, possibly*の副詞群の分析であるが、直前のプロジェクトにて *conceivably* が「モダリティ志向」なのに対して *perhaps* が「談話志向」というように、同種の副詞の中にも二つの方向性があることを示した。これを踏まえて、さらに分析を深めるべく、*perhaps* の談話的な性質を様々な方面から明らかにした。具体的には、生起位置、主語、倒置、疑問文といった、情報の流れと密接に関わる要因との関連を調査した。その際、主に挿入的用法に着目し、通常の用法と、さらには他の種類の副詞の場合と比較しながら分析を行った。結果として、*perhaps* をはじめとした法副詞はモダリティの意味を表すだけでなく、様々な語用論的機能を担い、具体的には談話の流れや話し手と聞き手のやりとり深く寄与していることが明らかとなった。

(3) さらに、上の言語事実や研究成果を踏まえながら、それまでの量的研究を質的研究へと展開した。「語用論的機能」の種類や傾向を探るべく、これまでに収集したデータを基に質的な研究を重点的に行い、各副詞の実証的研究を着実に進めた。具体的には *perhaps* を中心とした副詞の分析を質的に深化させるべく、個々の事例について文脈を広く見ることによって *perhaps* や *maybe* の働きをより詳細に分析した。考察の結果として、特に節の最後に生起するものについては、(A) 平叙文の中で発話の力を弱める効力(断定を避ける働き)を有するもの、(B) 疑問文の中で聞き手に確認をしたり、聞き手の答えを引き出したりするもの、さらに(C) 依頼の際の丁寧さに寄与するものなど、コミュニケーション上における重要な機能が多く見られたのである。

(4) 最後に、英語母語話者への質問紙調査に基づく実験を用いた手法を導入した。それまではコーパスを中心とする実証的な手法により、表現間の相違を主に語用論的な観点から分析を行ったが、特に(i) *conceivably, maybe, perhaps, possibly*の副詞群に対するコーパス研究を補完する狙いがある。副詞間の使用の相違に関わる各要因との相関の度合いや要因間の関係を総合的に捉えることを目指し、コーパス分析による調査結果と併せて考察を行った。結果として、文における Medial (文の真ん中) の位置に生起するものが更に二つの位置に分類することができ、同時にそれまでに分析を行った挿入句用法の有無と絡んで各副詞の使用に影響を及ぼしていることが明らかとなった。さらに、この点は理論的に所謂テーマ・レーマ構造と密接に関わっており、話し手と聞き手のやり取りにおいて当該副詞が重要な機能を担っていることを示唆するものである。以上のように、実証的な側面から分野横断的に重要な知見が得られ、同時に理論的な示唆を行うことができた。

(5) 以上の成果については日本英文学会関西支部大会にて口頭発表を、また日本英語学会のシンポジウムに登壇し、研究発表を行った。これを基に現在、学術雑誌に論文を投稿中である。20~21年度はコロナ禍のため、本務先や学会の運営において想定外の業務や対応に追われてしまい、残念ながら研究活動に時間を割くことができなかった。当該年度の成果については、今後、国内外の学会にて研究発表を行い、海外の雑誌にも論文の投稿を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松田早恵・天野貴史・鈴木大介	4. 巻 -
2. 論文標題 コロナ禍におけるオンラインアプリを用いた速読・多読活動の実践報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The JACET International Convention Proceedings: The JACET 60th Commemorative International Convention	6. 最初と最後の頁 202-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇・中村文紀・鈴木大介	4. 巻 第15号
2. 論文標題 of+抽象名詞の形式と機能の関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Fujiwara, Fuminori Nakamura, Daisuke Suzuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Iconicity in grammatical variation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of 10th International Conference of Experimental Linguistics	6. 最初と最後の頁 97-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Daisuke	4. 巻 25
2. 論文標題 Variation between modal adverbs in British English	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Functions of Language	6. 最初と最後の頁 392-412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/fo1.16009.suz	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木大介・藤原崇	4. 巻 13
2. 論文標題 英語法副詞における機能の拡大 主語名詞と述語動詞との関連から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語用論学会 第20回大会発表論文集 第13号	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 松田早恵・天野貴史・鈴木大介
2. 発表標題 コロナ禍におけるオンラインアプリを用いた速読・多読活動の実践報告
3. 学会等名 JACET第60回記念国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takashi Fujiwara, Fuminori Nakamura, Daisuke Suzuki
2. 発表標題 Iconicity in grammatical variation
3. 学会等名 10th International Conference of Experimental Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daisuke Suzuki, Takashi Fujiwara
2. 発表標題 Modal adverbs and iconicity
3. 学会等名 International Conference on Arbitrariness and Motivation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木大介
2. 発表標題 モダリティと多機能性 多様な語順を生む副詞の効果
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原崇・中村文紀・鈴木大介
2. 発表標題 of+抽象名詞の形式と機能の関係
3. 学会等名 日本語用論学会第22回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木大介
2. 発表標題 英語の副詞と類像性
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第13 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daisuke Suzuki, Takashi Fujiwara
2. 発表標題 Modality and discourse as determinants of the use of modal adverbs
3. 学会等名 International Conference on Evidentiality and Modality (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------